



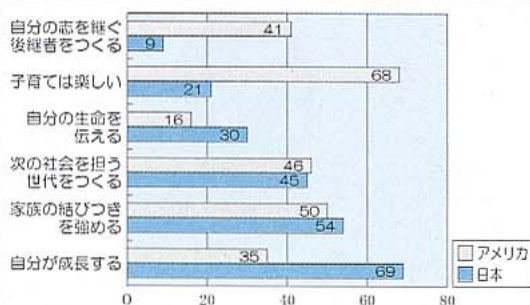
佐藤ヨシさん  
(深谷字原)

## 「までい」の思い出

— 生活に息づいていた「までい」 —

6月は、昔はちょうど田植えの季節でした。今のようにハウス栽培で苗を育てるのではなく、苗代に種もみをじかに蒔いて、そこで育った苗を集めて（取って）田植えをしていました。この苗を集める作業は朝早いうちから行いますが、昔は田植えの時期に雪が降ったりするほど寒かったので、苗代の水はとても冷たく、火を焚いてそこで暖を取りながらやったものです。田植えのときは、木の棒に等間隔に竹を打ちつけ、苗を植える目印の線を田んぼに引き、手作業で「までい」に苗を植えていきました。また、田植えの時は、朝ご飯を食べる時も家には上がらず、土手に簀をしいて食べました。午後のいっぷく（休憩）も外でしたが、そこにお酒が出たときは、男の人たちはすっかり酔ってしまい、そこからは田植えにならなかつたりしました（笑）。昔はたいていの農家は「ゆい」で田植えをしましたが、我が家は（飯館）分校が近く、親戚がいた関係で、よく分校の生徒たちが田植えや稲刈りを手伝ってくれたことを思い出します。

そういえば、わが家では田んぼをうなう（耕す）とき、かえって「までい」に耕すなといわれました。当然手作業でしたが、1回目で大まかに耕して、2回目に残ったところを耕し、そして3回目であえて全体を平らにならさず、所々を耕しました。これは稲にこの方がよく空気が入るという持論からでしたが、そのおかげか不思議と当時の苗の育ちが良かったんです（笑）。今は機械で効率よく作業をしますが、「ゆい」や学生たちへの感謝を忘れないようにしたいです。



子育ての意味

総務庁青少年対策本部「子どもと家族に関する国際比較調査」

左図で「子育てが楽しい」と感じている日本人が少ないという結果が出ています。なぜでしょうか？  
理由の一つに「育児は母親の仕事だ」という性別役割分業が自然とできてしまっていることが考えられます。「子育てが大変。つらい」という母親の言葉に、「それは一時の我慢」という人もいますが、母親を追い詰めているのは子供の世話の煩雑さだけでなく、元凶は精神的な孤独感、閉塞感ではないでしょうか。

子育てに専念する生活に、社会から取り残される不安を抱き、また、どんなに子育てに励んでも「母親なら当たり前」とされる虚しさ、苛立っているような気がします。それでは父親はというと「妻子を養うため身を粉にして働いているのだから、育児をしている暇はない」というところでしょうか。そのような状態なので「せめて私の話を聞いて。よくやっている」と時にはねざらつて」という妻の声は当然聞こえません。

パートナーとして互いの人生に関心を持ち、共に歩んでいこうとする姿勢こそが、子育て中の母親が夫に求めていることなのです。もっとも、そのためには生計の負担を夫にだけ課すのではなく、共に担うという姿勢を妻がもつことも大切になってくるようです。  
子供ができたなら、是非子育てを楽しみましょう。夫婦二人、互いに思いやりを持ちながら...